

スポーツとLGBTQ+のアクション

東京からパリへ

オリンピック・パラリンピック競技大会でプライドハウスがつないだバトン

2022—2024

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION



チームからのあいさつ

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会をきっかけにスタートした「プライドハウス東京」は、大会終了後も活動の火を絶やすまいと、継続してスポーツ界にアプローチをしてきました。2024年のパリオリンピック・パラリンピック競技大会で実施される「プライドハウスパリ」のオープニングセレモニーで「東京からパリへバトンをつなぐ」ことを目標に、3年かけて日本のスポーツコミュニティでアライの輪を広げ、アスリートが安心してカミングアウトできる環境づくりに取り組んできました。そんな私たちの活動は公益財団法人日本財団からの助成によって支えられてきました。少しずつ一緒にできる団体やアスリートの輪が広がり、スポーツコミュニティの中でLGBTQ+当事者が直面する課題に関心を寄せてくださる方が増えてきて心強いばかりです。

しかしながら、社会を変化させることは簡単ではないと痛感する3年間でもありました。東京2020大会に出場したアスリートのうち、カミングアウトしている日本のLGBTQ+アスリートは0人でしたが、パリ2024大会でもその数字に変化はありませんでした。また、カミングアウトしたアスリートが差別や嫌がらせを受けることもあり、LGBTQ+当事者を守る環境が整っていないことも感じてきました。これからもLGBTQ+インクルーシブなスポーツ界と社会の実現を目指し、スポーツコミュニティとともに、継続してアクションを続けていきたいです。

創設者からのあいさつ



松中 権

プライドハウス東京初代代表
認定 NPO 法人グッド・エイジング・エールズ代表

2015年夏、Pan/Parapan American Gamesにあわせて設置されたPride House Toronto。過去のプライドハウス主催団体、リオと平昌の大会に向けて準備する団体とともに、東京から招聘されて、3日間にわたるSport Inclusion Summitに参加しました。ロシアでのLGBTQ+に差別的な法律制定を経て、今後は、世界各地のLGBTQ+を取り巻く環境をお互いに理解し、スポーツを超えて社会全体をより包摂的に変えるためにコミュニティで連帯しよう、ということが共有されました。

世界が初めて経験した、未曾有の新型コロナウイルス感染拡大中に奇跡的に生まれたプライドハウス東京レガシーは、まさに、連帯そのものだったと感じています。2024年夏、いろんな方々の思いと経験とともにパリへとバトンを渡し、そして年が明けた今、対峙するのは世界における分断、LGBTQ+コミュニティへの巨大なバックラッシュ。プライドハウス東京における今後の活動を通して、さまざまな違いを力に変えていく、小さなきっかけや希望が生まれることを心から祈ります。



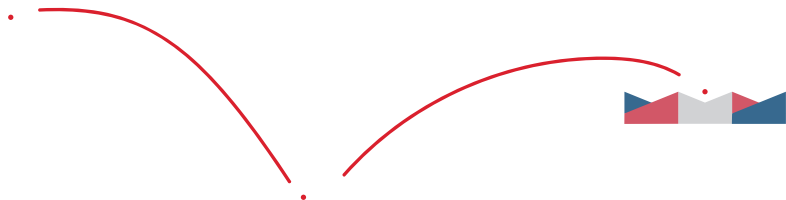
「プライドハウス東京」とは

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、LGBTQ+に関する理解を広げることを目指し立ち上がったプロジェクト（2023年4月にNPO法人化）。新宿御苑前にある常設の大型総合LGBTQ+センター「プライドハウス東京レガシー」を拠点に、NPOや個人、企業がコンソーシアムをつくり、個別のテーマに基づき8つのチームに分かれて活動しています。「アスリート発信」チームでは、LGBTQ+とスポーツの接点から、誰も排除しないLGBTQ+インクルーシブなスポーツ環境づくりと、スポーツを通じたLGBTQ+に関する情報発信を行っています。



もくじ

p.2	チーム／創設者からのあいさつ
p.3	プライドハウス東京とは／もくじ
p.4	はじめに～スポーツの中の課題背景～
p.5	「ともに動く」チーム 2つの活動の柱
p.6－7	スポーツにおける主要な活動年表 2019—2024
p.9	スポーツ関連団体との取り組み
p.10－11	アライアスリート・プロジェクト
p.12－13	ユースのスポーツ現場を変えていくための取り組み
p.14－15	東京2020大会からパリ2024大会へ～パリでの取り組み～
p.16	数字で見る3年間の活動記録
p.17	メディア掲載実績
p.18－19	これまでとこれから／LGBTQ+を取り巻くスポーツ界の動き
p.20	「プライドハウス東京レガシー」とは





はじめに

～スポーツの中の課題と背景～



スポーツの力で、 誰もが自分らしく生きられる社会へ

「プライドハウス」は、2010年のバンクーバー冬季オリンピック・パラリンピック競技大会を機に始まった国際的な取り組みです。性の多様性に関する正しい知識を広げることやLGBTQ+の選手やファン、その家族などが安心して集える居場所を提供すること、そしてLGBTQ+に対する差別や偏見が特に強いとされるスポーツ界を変革することを目的に、地元のNGOやNPOが主体となり世界各地でプライドハウスを展開してきました。

しかし、日本のスポーツ界には、いまだ多くの課題が残されています。例えば、誰もが自分らしく競技に打ち込める環境が少ないことは大きな問題です。世界ではオリンピック出場選手の中にもLGBTQ+当事者であることをカミングアウトする人が増えてきていますが、日本ではLGBTQ+アスリートであることを公表する選手は東京2020大会、パリ2024大会の過去二大会で0人でした。日本のスポーツ現場では、カミングアウトすることが大きなリスクを伴うと判断されていることがうかがえます。実際、カミングアウト後に組織内で居場所がなくなる、本人の許可なくSNSで性的指向を公にされるなどの事例が発生しています。そして、そうしたトラブルが発生した際、安心して相談できるような場所がほとんどなく、当事者アスリートへのサポート環境が

整っていないことも大きな課題だと言えます。

加えて、スポーツに関わるLGBTQ+当事者は、差別や偏見、周囲の無理解などにより、メンタルヘルスの複合的なリスクにさらされています。アスリートとして成果を出さなければならないプレッシャーに加え、性的指向や性自認に起因する差別や偏見、スポーツ現場で自分らしくいられないことなどが、当事者アスリートのメンタルヘルスを脅かしています。

「プライドハウス東京」は設立当初から、このような国内のスポーツ環境を変えるための活動を行ってきました。また、東京2020大会を重要な契機と捉え、スポーツ界にとどまらず、誰もが自分らしく生きることのできる社会づくりを目指して活動を展開してきました。これまでにNPO、専門家、企業、アスリートなど、セクターを超えた多様な組織が連帯し、協働してプロジェクトを実施。日本初の常設大型LGBTQ+センター「プライドハウス東京レガシー」の設置など、具体的な成果を生み出しています。

プライドハウス東京は、スポーツの持つ社会変革の力を信じ、すべての人が自分らしく安心して競技に打ち込める環境づくりと、多様性が尊重される社会の実現に向けて、これからも歩みを進めていきます。





「ともに動く」チーム 2つの活動の柱

1 誰も排除されないLGBTQ+インクルーシブなスポーツ環境をつくる。

伝統的な「男らしさ」が称賛され、異性愛が当然であるという文化とともに発展してきたスポーツ界において、LGBTQ+の人々はさまざまな困難に直面しています。競技、更衣室、ユニフォーム等、その活動の多くが「男性」と「女性」に分かれるスポーツの中で、自分らしく安心・安全にスポーツを楽しむ機会を奪われてきた人たちがいます。選手、指導者、スタッフ、ファンをはじめとするスポーツに関わるすべての人に、性の多様性に関する正しい知識を普及し、これまでのスポーツの「当たり前」を疑いながら、性自認や性的指向、性別表現を理由に、誰も排除されることのないスポーツ環境の実現を目指しています。

2 スポーツやアスリートの力を、誰も排除されないLGBTQ+インクルーシブな社会の実現のために活用する。

スポーツやアスリートは、人々の関心や共感を集め、社会を変える力を持っています。ジェンダー、国籍、障がい、性的指向、年齢、宗教的信念等の異なる多様な「人」がいてはじめて成り立つスポーツに、人々は熱狂し心を動かされます。そんなスポーツやアスリートだからこそ、始められる対話があります。スポーツやアスリートを通してだからこそ、聞こえる声や見える課題があります。私たちは、すべての人の尊厳と権利が守られ、ありのままで安心して活躍できる社会の実現のために、スポーツの力を活用しています。

東京2020からパリ2024へ ～3年間の歩み～

2022

アライネットワークの基盤形成

- 国内スポーツ関連団体への研修
- アライアスリートの育成
- LGBTQ+ユースの体育現場の経験に関する調査

2023

アライネットワークの強化

- 国内スポーツ関連団体への研修
- アライアスリートの育成
- ユースとの連携事業

2024

アライとともに

- パリ2024大会での発信
- 3年間の活動の軌跡をまとめたアーカイブ事業
- ユース主導のプロジェクト



スポーツにおける主要な活動年表 2019—2024

September 20 - November 4

『ラグビーW杯2019』での盛り上がりに合わせて、スポーツとLGBTQ+をテーマにした期間限定の情報発信施設「プライドハウス東京2019」を東京・原宿「subaCO」にてオープン。



September

一般財団法人東京マラソン財団と覚書協定を締結。

『東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会』期間中

バンクーバー2010大会以降設立された世界の「プライドハウス」史上初めて、大会組織委員会による「公認プログラム」の認定を受ける。大会期間中には、プライドハウス東京レガシーにて、LGBTQ+であることをオープンにする国内外のアスリートからのメッセージパネル展も開催。



2019

2020

2021

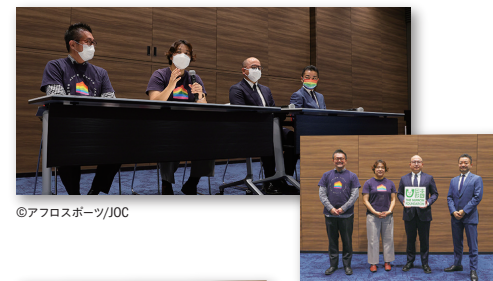
October 11

日本で初めてとなる常設の大型総合LGBTQ+センター「プライドハウス東京レガシー」を国際カミングアウトデーの10月11日に、東京・新宿にオープン。



April 1

プライドハウス東京「アスリート発信」チームが、公益財団法人日本財団より助成を受けて、東京2020大会を契機に進めてきた取り組みを継続・強化。
(2025年2月現在、継続中)



©アフロスポーツ/JOC

©アフロスポーツ/JOC

June 13

公益財団法人日本オリンピック委員会 (JOC) と4年間の包括協定を締結。



©アフロスポーツ/JOC

March

「LGBTQ+ユースの体育現場の経験に関するアンケート」の調査結果を発表。

※詳細はp.12へ



July 21 - 23

『世界水泳選手権2023福岡大会』の開催に合わせて「プライドハウス福岡」を実施。

- プライドハウス東京のメンバーとアライアスリートが、高島宗一郎福岡市長を表敬訪問し、意見交換。
- 福岡市人権部と共催で、大会会場にてLGBTQ+情報発信ブースを設置。
- 福岡市内にて、LGBTQ+当事者が安心して集まれる場を創出。ダイビングの競技解説やスポーツにおけるLGBTQ+の課題を発信。
- 公益財団法人日本水泳連盟アスリート委員会の協力のもと、『プライドトークショー ～水泳界からLGBTQ+インクルーシブな社会を目指して～』を開催。同大会で銀メダルを獲得したアーティスティックスイミングアメリカ代表のビル・メイ選手や、パルセロナ1992オリンピック200m平泳ぎ金メダリストの岩崎恭子さん、東京2020 水球日本代表の志水祐介さんが登壇。



October 14

WEリーグカップ決勝「EMPOWERMENT MATCH」でジェンダーやLGBTQ+に関する情報発信ブースを設置。

December 4

公益財団法人日本ラグビーフットボール協会及び一般社団法人ジャパンラグビーリーグワンと包括協定を締結。



2022

2023

2024

August

アライアスリート・プロジェクトを始動。

※詳細はp.10&11へ



February 18

『ユースと考える、だれもが安心・安全に楽しめるスポーツのためのカンファレンス』を開催。ユースやアスリート、スポーツ指導者、教員などが集い、LGBTQ+とスポーツの課題についてディスカッション。

※詳細はp.12&13へ



May 26

NTTジャパンラグビー リーグワン2023-24 プレーオフ トーナメント決勝でブースを設置。一般社団法人ジャパンラグビーリーグワンとNTTグループと協働でリーフレットを制作。



July

パリ2024オリンピックの開催に合わせて、現地パリにて記者会見やトークショーといったさまざまな取り組みを実施。

※詳細はp.14&15へ



2022 October - 2023 March

日本オリンピックミュージアムで開催された『オリンピックが目指す平和な世界～東京2020大会にみる多様性と調和～』の企画展にて、LGBTQ+の取り組みに関する展示に協力。

Sports for Everyone





スポーツ関連団体との取り組み

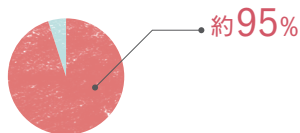
ある組織がLGBTQ+の課題に取り組む時、そこに属する一人ひとりが性の多様性に関する正しい知識を持ち、多様な個人を包摂するための共通の価値観を持っていることが大切です。ビジョンや規定、行動規範といった組織としてのスタンスのほかにも、個人が何げなく発する言葉や態度が組織文化を形成していきます。プライドハウス東京では、国内競技団体をはじめとするスポーツ関連団体やチームに対して、LGBTQ+の基礎知識やスポーツにおける課題等に関する研修を実施しています。

実施団体（一部抜粋）

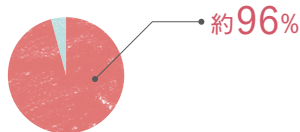
公益財団法人日本オリンピック委員会、公益財団法人日本水泳連盟、公益財団法人日本ソフトボール協会、公益財団法人日本ラグビーフットボール協会、公益財団法人日本テニス協会、公益社団法人日本ホッケー協会、公益社団法人ジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグ、公益社団法人日本ダンススポーツ連盟等

研修に参加して

「大変満足」or「満足」と回答



研修参加前と比べてLGBTQ+に関する知識や理解が「大いに深まった」or「深まった」と回答



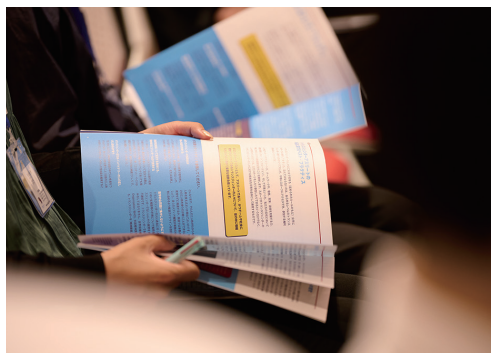
公平でインクルーシブなスポーツ報道を目指して

国際的なスポーツの現場を見ると、LGBTQ+であることをオープンにして活躍する選手やコーチは年々増加しています。パリ2024大会に出場したLGBTQ+アスリートは、241人に上りました（Outsport, 2024）。こうしたアスリートの存在は多くのLGBTQ+当事者にとってのロールモデルとなり、スポーツ界に明るい光をもたらす一方で、正しい知識や理解の不足に起因する誤ったメディアの報道も問題視され

ていました。そこで、パリ2024大会開催前の2024年6月、日本オリンピック委員会とともに、国内のメディア関係者約50人を対象に『スポーツ分野の報道向けブリーフィング～公平でインクルーシブなスポーツ分野・報道に向けて』を開催しました。LGBTQ+を公表する選手たちを、いち「アスリート」として正しく報道するために気をつけるべき



情報や言葉の選択、そして国際オリンピック委員会（IOC）が2024年に改訂した『Portrayal Guidelines for gender-equal, fair and inclusive representation in sport（スポーツにおけるジェンダー平等、公平でインクルーシブな描写のための表象ガイドライン）』の情報等の共有を行いました。





アライアスリート・プロジェクト



「アライ (ally)」とは、
同盟、味方などを表す言葉です。

LGBTQ+の課題を理解し、スポーツ界からともに社会を動かすアクションをする「アライアスリート」の輪を広げるプロジェクトを2022年より始動。オリンピックやパラリンピアンを含む、現役／元トップアスリートを対象に、LGBTQ+とスポーツやLGBTQ+アスリートの声を聴く機会を創出しています。

アライアスリート・ウェブサイト



アライアスリート・プロジェクト

概要

LGBTQ+とスポーツに関する
全3回のアライアスリート・トレーニング

研修内容

1
LGBTQ+の基礎知識と
国内の動き

2
LGBTQ+
当事者アスリートから学ぶ

3
アライアスリートの
アクションを考えよう！

※年度によって若干の変更あり

43人のアスリートが
トレーニングを修了

(2025年2月時点)



「アライアスリート」として
プライドハウス東京とともに

発信

- ・アウトリーチ活動への参加
- ・スポーツ関連団体への研修の登壇
- ・メッセージ動画への出演
- ・ウェブサイトへのメッセージの掲載
- ・インタビュー記事への出演 など

アライアスリートの活動 (一部抜粋)

2023

3月 March

「2022アライアスリート
メッセージ」動画への出演



7月 July

『世界水泳選手権2023福岡大会』の開催に合わせて実施した「プライドハウス福岡」にて、大会会場のLGBTQ+情報発信ブースへの訪問や福岡市内でのトークショーに登壇



10月 October

「2023アライアスリート
メッセージ」動画への出演



11月 November

埼玉県吉川市主催の講演会への登壇
神奈川県横浜市の人権啓発研修への登壇



2024

2月 February

プライドハウス東京主催の『ユースと考える、だれもが安心・安全に楽しめるスポーツのためのカンファレンス』に参加。
24歳以下のユースや体育教員、スポーツ指導者等と意見交換



7月 July

『パリ2024オリンピック競技大会』に合わせて、「プライドハウス」の関係団体と現地パリにて実施したトークショーへの登壇



アライアスリートからのメッセージ

MESSAGES♥

たにもと あゆみ
谷本 歩実



2004 北京・2008 アテネ 柔道 金メダリスト
公益財団法人日本オリンピック委員会理事
アライアスリート研修 2023 修了

競技者から選手をサポートする立場となり、一人でも多くの選手が安心してスポーツに取り組める環境をつくりたいと考えています。そのためには、一人ひとりが「心理的安全性」を感じられることが非常に大切だと思っています。自分自身の学びが役立てばと思い、アライアスリート研修にも参加しました。

日本から一步世界に出てみると「足るを知る」という言葉に気づかされます。豊かな感受性を育み、互いに思いやりある社会の実現へと行動していきたいと思っています。

とくなん けんた
徳南 堅太



2016 リオ・2020 東京
フェンシング サーブル日本代表
アライアスリート研修 2022 修了

プライドハウス東京の活動に参加したのは、多様な背景を持つすべての人が安心してスポーツに取り組める環境をつくりたいという思いからです。特に、当事者以外の立場である私がこのような取り組みに参加し、学び、行動することが、偏見や無理解を減らし、社会全体の意識を変えていく大きな一歩になると信じています。

スポーツは人をつなげる力を持っていますが、その恩恵をすべての人が平等に享受できる社会の実現には、誰もが「心理的安全性」を感じられる環境が必要です。アライアスリートとして、少しでもその一助になれるよう努力し、未来の世代に思いやりある社会を届けたいと思います。



ユースのスポーツ現場を変えていくための取り組み

誰もが安心・安全に、自分らしく楽しめるスポーツ環境を目指して

LGBTQ+ユースの 体育現場の経験に関するアンケート



調査冊子の情報はこちらから▲

プライドハウス東京では、国内のスポーツ環境の現状を明らかにするため、各種調査事業を行っています。その一環として、2022年11月から12月に実施したのが「LGBTQ+ユースの体育現場の経験に関するアンケート」です。18歳から29歳の大学生年代838名を対象とし、Google Formsを用いたオンラインアンケートを通じて、LGBTQ+当事者も含む多様なユースが体育の授業でどのような経験をしたのか、具体的な声を集めました。

その結果、LGBTQ+当事者は、**学校で行われる体育の授業に対してポジティブな気持ちを抱きにくく、スポーツが自分らしくいられる手段になりにくい傾向にある**ことが分かりました。また、LGBTQ+当事者に対する心ない言葉を耳にする機会が多いことや、体育教員の理解が不十分なケースが散見されることも明らかに。さらには、更衣室の使用や服装の規定なども性の多様性をあまり配慮していない現状があり、そうした環境がLGBTQ+当事者の心理的負担を増大させている可能性も示唆されました。これらの結果は、学校体育の現場がLGBTQ+ユースにとって必ずしも安心・安全な環境となっていないことを示していると言えます。



国内初、ユース主体のカンファレンスを開催



ユースカンファレンスの情報はこちらから▲

2024年2月18日には、ユース、体育教員、スポーツ指導者、アスリートなどが参加した『ユースと考える、だれもが安心・安全に楽しめるスポーツのためのカンファレンス』を開催しました。本会では、LGBTQ+当事者のアスリートやインフルエンサーによるパネルディスカッションの中で、現在の日本の体育・スポーツ現場にまだ「ジェンダー二元論」「男性中心主義」的な考え方が根強く残っていることを再確認。その気づきをもとに、6つのグループに分かれ、「知識を得るために行動する」「社会の空気を換えるために選挙に行く」といった、社会や学校の現場を変えるための具体的なアクションプランも検討しました。それぞれの経験や意見などを率直に話し合いながら、スポーツにおける多様な性のあり方について考えを深める機会となりました。



ユース世代のヴォイス

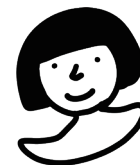
YOUTH VOICE

カンファレンスに参加したユース世代の感想や意見を一部ご紹介します。



スポーツとジェンダーは、切っても切り離せない問題だと思います。社会や学校の授業、部活動をより良い方向に変えるためには、固定観念を取り払い、多様な人が一緒になって想像力を働かせ、問題の現状や解決策を考えていくことが大切だと感じました。

私たちセクシュアルマイノリティが声をあげても、社会や周囲の人たちに自分たちの声が「届かない」と感じてしまうことがよくあります。しかし今回、そうした思いを抱えているのは自分だけではないのだと知ることができました。日常生活では埋もれてしまう小さなモヤモヤを同じように抱えている人がいる。この気づきを、これからの活動の原動力にしていきたいです。



スポーツとジェンダーにまつわるつらい経験を可視化することができ、非常に有意義な会でした。しかし、こうした会に参加している方は社会全体のほんの一部です。まだ問題の渦中にいる方はたくさんいます。そうした方々の声をもっと社会に届いてほしいです。



東京2020大会から パリ2024大会へ

パリの地で東京2020大会のレガシーを語る JOCと共同記者会見を開催



▲7月29日、JOCとの共同記者会見にて

2024年7月29日、TEAM JAPAN HOUSE（フランス・パリ日本文化会館内）にて、公益財団法人日本オリンピック委員会（JOC）との共同記者会見を実施しました。

プライドハウス東京は、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会で大会組織委員会の公認プログラムとなって以来、同委員会と連携した取り組みを多数手がけてきました。こうした活動のあり方は、2010年にカナダ・バンクーバーでスタートしたプライドハウスの歴史史上初めてのことでした。この連携をきっかけに2022年6月、プライドハウス東京とJOCは、4年間の包括連携協定を結ぶこととなりました。特に2022年から2024年までの3年間は、プライドハウス東京が公益財団法人日本財団からの助成を受け実施する、アライアスリートの育成やLGBTQ+を取り巻く環境について理解を深める研修の開催、スポーツの大会を通じたアウトリーチなどの幅広い活動で協働してきました。今回の会見は、そうした実績について日本のメディアやスポーツ関係団体に広く知っていただく機会となりました。



LGBTQ+に関する展示会も開催

7月25日～8月11日にわたって開催された2024年パリオリンピック・パラリンピック競技大会期間中、TEAM JAPAN HOUSEにおいて、LGBTQ+に関する情報発信コーナーを設置しました。会場では、スポーツとLGBTQ+に関するパネル展示やアスリートからのメッセージ動画、ガイドブックの配布を通じて、スポーツ界や社会の中で「ダイバーシティ&インクルージョン」を追求する重要性を発信。日本のスポーツファンや、海外の大会観戦客、大会関係者など多くの方が足を止め、スポーツ界における多様性への取り組みについて理解を深める場をつくることができました。

プライドハウスの思いをパリへ バトンをつなぐセレモニー

7月29日、セーヌ川沿いのRosa Bonheur sur Seineにて開催されたプライドハウスパリのオープニングセレモニーに、プライドハウス東京から前代表の松中権らが出席しました。プライドハウスパリは、プライドハウス史上初めてIOCから認定を受けた取り組みとなりました。そのオープンを記念し、プライドハウス東京からはハンドオーバーのバトンとして、日本の伝統工芸「水引」と陸上トラックをモチーフに、プログレス・プライド・フラッグの11色を配した特製フラッグを贈呈しました。



▲7月29日、プライドハウスパリのオープニングセレモニーにて

プライドハウスが紡ぐ未来 3団体とアスリートによる国際対話

7月30日には、セーヌ川沿いのRosa Bonheur sur Seineにて、「大規模スポーツ大会を通じたLGBTQ+の権利運動の促進」と「プライドハウスに期待される役割」をテーマとしたトークショーを開催しました。登壇したのは、プライドハウスパリ共同代表のGOUPILLE Jérémy氏、プライドハウスインターナショナル理事のEmy Ritt氏、アライアスリートの小谷実可子氏、プライドハウス東京理事(当時)の杉山文野、共同代表(当時)の野口亜弥です。



▲ 7月30日、セーヌ川沿いのRosa Bonheur sur Seineにてトークショー

LGBTQ+当事者で、フェンシングの日本代表選手として活躍してきた杉山は、現役時代、「自分らしく男性として生きること」と「アスリートとして競技の第一線で活躍し続けること」が両立せず、両者のはざまで深く悩んだ経験があるといいます。

「当時、プライドハウスのような場所があれば、まだ競技を続けていたかもしれない。日本ではまだLGBTQ+当事者であることをカミングアウトする選手は少ない。だからこそ、この活動には大きな意味があると思っている」

杉山は、五輪開催を契機として各国に設置が進むプライドハウスの存在意義を強調しました。

また、小谷氏は、東京2020大会での組織委員会会長の女性差別発言を契機に、多様性やLGBTQ+への理解を深めていった経緯を共有。実際にトランスジェンダーの選手をチームに迎え入れた経験から、スポーツを通じた相互理解の可能性を示しました。



▲ プライドハウス東京理事(当時)の杉山文野(左)とアライアスリートの小谷実可子氏(右)



▲ 世界はプライドハウスの活動とともに着実に変化しつつあると、プライドハウスインターナショナル理事のEmy Ritt氏

そうした話を受け、Emy Ritt氏は過去10年間に16カ国で展開された25のプライドハウス活動に言及。

「世界はプライドハウスの活動とともに着実に変化しつつある。誰もがスポーツを心から楽しめる世界にすること。その課題に引き続き挑み続けていきたい」

と思いを述べました。GOUPILLE Jérémy氏も大会終了後のプライドハウスパリについて、「LGBTQ+当事者にとってより良い空間をつくりたい」「誰も読まなくなった書籍のような、負の遺産にはしたくないと強く思っている」と構想を展開。野口も、東京での経験を踏まえ、

「メガスポーツイベントは、政府、競技団体、市民社会が一体となって多様性について議論する貴重な機会となる」

と指摘。アジア地域でのプライドハウス展開への期待を示しながら、各地域のプライドハウスが学び合い、支え合うネットワークの重要性を訴えました。このトークショーを通じて、プライドハウスがスポーツの世界における多様性の象徴として、また誰もが自分らしく参加できるスポーツ環境を実現するための重要な拠点として、その役割がますます期待されていることが確認されました。



▲ 支え合うネットワークの重要性を訴えるプライドハウス東京共同代表(当時)の野口亜弥



▲ トークショー後、プライドハウス東京グッズを手に、プライドハウスパリ共同代表のGOUPILLE Jérémy氏



パリでの取り組みをまとめた動画はこちら



数字で見る3年間の活動記録

Since 2022

アライアスリートの数

43人

LGBTQ+研修を通じてリーチした
スポーツ関係者の数

600+人

スポーツ関連団体への研修数

13団体

2022

公益財団法人日本オリンピック委員会

NPO法人Jキャンブ

公益財団法人日本水泳連盟

公益財団法人日本ソフトボール協会

公益財団法人日本ラグビーフットボール協会

2023

公益財団法人日本テニス協会

ツエーゲン金沢

公益社団法人日本ホッケー協会

公益社団法人ジャパン・プロフェッショナル・

バスケットボールリーグ

2024

公益社団法人ダンススポーツ連盟

公益社団法人全日本アーチェリー連盟

福島ユナイテッドFC

カーリングチーム GRANDIR

スポーツの試合や大会を通じた
アウトリーチの数

20+

(一部抜粋)

2022

企業対抗駅伝2022 東京大会

キリンチャレンジカップ2022 サッカー男子日本代表戦

大和シルフィードホーム戦 ブライドマッチ

(2022プレナスなでしこリーグ2部 第13節)

リボビタンD チャレンジカップ2022 ラグビー男子日本代表戦

水泳の日2022・高知

2022-23WEリーグカップ決勝「EMPOWERMENT MATCH」

東京レガシーハーフマラソン2022

Thank you Tokyo! Festival and Ceremony (IOC主催イベント)

2023

大和シルフィード ブライドマッチ (2023プレナスなでしこリーグ1部第13節)

太陽生命ウィメンズセブンズシリーズ2023

ブライドハウス福岡 (第20回FINA世界水泳選手権2023福岡大会にて)

水泳の日2023・広島

JOCと協働で「スポーツ界にアライを増やそう!」リーフレットを制作。

杭州アジア大会 TEAM JAPANに配布。

東京レガシーハーフマラソン2023

2023-24 WEリーグカップ 決勝

東京マラソン2023

2024

NTTリーグワン2023-24 プレーオフ決勝

大和シルフィードホーム戦 ブライドマッチ

(2024プレナスなでしこリーグ2部 第16節)

リボビタンDチャレンジカップ2024 ラグビー男子日本代表戦

パリ2024オリンピック・パラリンピック競技大会

東京マラソン2024

関連記事の掲載数

70+
記事

メディア掲載実績（一部抜粋）

2022

WEB記事

日本経済新聞 | 2022/6/13 |
「プライドハウス東京と協定 JOC、性的少数者の拠点」

新聞記事

読売新聞 | 2022/10/13 |
「LGBTQ『身近に当事者』JOC理事講演、理解呼びかけ」

2023

新聞記事

読売新聞 | 2023/3/24 |
「LGBTQ『体育に不安』支援団体調査」

WEB記事

教育新聞 | 2023/4/23 |
「LGBTQ+のユース世代 体育の授業でネガティブな気持ちに」

WEB記事

読売新聞オンライン | 2023/7/23 |
「世界水泳福岡大会ファンゾーンに『LGBTQ+』の啓発ブース...
市内でトークショーも」

WEB記事

朝日新聞デジタル | 2023/7/31 |
「性的少数者公表のオリパラ選手200人超も日本人ゼロ 選手らが議論」

WEB TV

OurPlanet-TV | 2023/9/22 |
「『LGBTQ差別解消へ』アライアスリートを育成」

新聞記事 WEB記事

毎日新聞 | 2023/9/28 |
フィールドの向こうへ「学ばなければ始まらない」

WEB記事

日刊スポーツ | 2023/12/4 |
「【ラグビー】日本協会&リーグワンがLGBTQ+理解促進へ包括協定締結
『横に広く、縦に深く』」

2024

WEB記事

毎日新聞 | 2024/6/8 |
スポーツ界の片隅へ「性別理由に選手登録できず 積み重なる『もやもや』体験」

WEB記事

Reuters | 2024/7/30 |
「Pride House Paris takes the torch from Pride House Tokyo」

WEB記事

Paris2024公式ウェブサイト | 2024/7/30 |
「Paris 2024 Olympics: the rainbow Games — a brand new Pride House
takes up residence on the banks of the river Seine」

WEB記事

共同通信 | 2024/8/6 |
「性的少数者の情報発信 パリ五輪、各地で理解促進」



これまでとこれから



杉山 文野

NPO 法人プライドハウス東京理事
元フェンシング日本代表
公益財団法人日本オリンピック委員会
NPO 法人東京レインボープライド理事

FUMINO SUGIYAMA

トランスジェンダーを公表した日本初のJOC理事ということもあり、この3年間で私のところには、当事者アスリートからはもちろんのこと、選手からカミングアウトを受けたという協会関係者などからの相談を数多く受けることになりました。

これはプライドハウス東京による、LGBTQ+とスポーツに関する情報発信が、以前に比べ大きく飛躍した成果であると考えます。

一方で、現在も日本のアスリートの公でのカミングアウトはほぼ見られません。これが日本のスポーツ界の現状を物語っているのではないかと思います。長年積み重なってきた差別と偏見をたった数年で解決しようということ自体に無理があり、中長期で見た継続的な支援が必要だと感じています。

特にトランスジェンダーアスリートに関しては、世界的なバックラッシュも起こっており、批判的な意見やデマが無限に飛び交うなど当事者アスリートの心理的安全性は低下しています。

このような状況下では、継続した活動によってスポーツ界全体としてアライな文化を醸成する必要があります。

村上 愛梨

NPO 法人プライドハウス東京理事
ラグビー 15 人制元日本代表
横河武蔵野アルテミ・スターズ所属

AIRI MURAKAMI



@opt_united

私が2021年にメディアを通してLGBTQ+であることをカミングアウトした時、私はまだ周囲の多くの人にそのことを伝えていませんでした。カミングアウトした結果、職場で問題になってしまったり、LGBTQ+当事者であることで経験した高校時代のエピソードを話したことで、同級生に裁判を起こされそうになるといった問題にも直面しました。

しかし、3年が経過した今、同じ競技者である当事者から相談を受けることが増えたり、カミングアウトという形ではなくとも、SNSで自分らしく、自身のパートナーのことを載せる選手も見られるようになりました。

これからの3年間では、さまざまな反応に対して、根っこの部分から対応策の引き出しをたくさん準備することが大切になってくると思っています。

下山田 志帆

元女子プロサッカー選手
株式会社 wagamama 共同代表

SHIHO
SHIMOYAMADA



大和シルフィードに所属していた際、プライドハウス東京主導でLGBTQ+の研修やプライドマッチを実施していただきました。このような活動をほかのチームでも行っているのを見て、活動を行うチームが増えていくことに、当事者のひとりとして嬉しさを感じています。

一方で、啓発が進む中で「どんなアクションをしたらいいのか分からない」という選手たちの声を耳にすることもありました。プライドハウス東京のその公共性や信頼感から、選手たちへの働きかけがより重要になってくると思います。みんなが安心できるスポーツ環境をつくるためには、現場に関わる人たちの意識を変えていくことが必要です。今後は、クラブや選手の理解を深めるだけでなく、クラブや選手が「自分たちも!」とアクションに移しやすい環境や仕組みを整える取り組みの必要性も感じています。



LGBTQ+を取り巻くスポーツ界の動き (東京2020大会を中心に)

2015 国際オリンピック委員会 (IOC) が「オリンピック憲章」を改訂。「性的指向」による差別を禁止することを根本原則に追記した。東京オリンピック・パラリンピック組織委員会も2017年の「調達コード」に「性的指向・性自認」や「性的少数者 (LGBT等)」を記載。

2015 IOCがトランスジェンダー選手の参加規定を改訂。外性器の変更および生殖器官の摘出などの外科的手術は必要要件から外れる。男性から女性に移行した選手の参加に関しては、性自認の確認とテストステロンと呼ばれるホルモンの値を基準の中心に出場カテゴリーを定める。

2016 リオ2016大会に、**LGBTQ+を公表する68人の選手が出場** (Outsports, 2016)。

2019 ラグビーワールドカップ2019の開催期間中、**国内で初めてのプライドハウス**となる「プライドハウス東京2019」が東京・渋谷に期間限定でオープン。

2021 IOCが「公平で、包括的、そして性自認や性の多様性に基づく差別のないIOCの枠組み (IOC和訳)」を新たに策定。IOCが全競技共通のルールを定めるのではなく、**各国競技連盟が科学的根拠に基づいて、人権侵害のない公平・公正なカテゴリー分け**の検討を行うことを求める。

東京2020大会に、**LGBTQ+を公表する222人の選手が出場** (Outsports, 2021)。

ゲイの当事者であることを公表しているトム・デイリー選手 (英国) がシンクロナイズドダイビング10メートル高飛び込みで金メダルを獲得。

「自分がゲイであり、オリンピックチャンピオンであることをとても誇りに思っています」

ウェイトリフティングのローレル・ハバード選手 (ニュージーランド) が、トランスジェンダーを公表する女性選手として初めて、自認する性別カテゴリーでオリンピックに出場。

「私はずっと、ただ“私自身”でいたただけなんです。今回、その機会をもらえたことがとてもうれしい。私がここにこうしていることで誰かに勇気を与えられたらと思っています」

2023 LGBTQ+当事者を含むすべての人に開かれた4年に1度のスポーツの祭典「**ゲイゲームズ**」が、**アジアで初めてとなる香港で開催**。

2024 パリ2024大会に、**LGBTQ+を公表する過去最多の241人の選手が出場** (Outsports, 2024)。



プライドハウス東京レガシー



「プライドハウス東京レガシー」は、すべての人に扉を開く常設の総合LGBTQ+センターです。
LGBTQ+の情報を発信し、安心・安全な居場所を提供しています。

住所 〒160-0022
東京都新宿区新宿1-2-9 JF新宿御苑ビル 2階
開館時間 月・火・金・土・日 13:00～19:00
休館日 水・木
どなたでも、無料でご利用いただけます。



ご寄付も受け付けています。詳細はホームページをご覧ください
<http://pridehouse.jp/>

スポーツとLGBTQ+のアクション

～東京からバリへ オリンピック・パラリンピック競技大会で
プライドハウスがつないだバトン～(2022～2024)

第1版 2025.03.31 発行
発行：プライドハウス東京「アスリート発信」チーム
デザイン：妹尾亜留美
編集協力：みらい編集室 市岡光子
校正：山縣真矢
助成：公益財団法人日本財団



レガシーWebsite



@PrideHouseTokyo



@PrideHouseTokyo



@PrideHouseTokyo